



1



2



3

## 桑山忠明展 / Untitled: Tadaaki Kuwayama

2011.1.8-3.21

1960年代よりニューヨークを拠点に活動し、一貫した態度で芸術に向き合う現代美術家、桑山忠明の最新の表現を紹介する個展。

東京藝術大学で日本画を学んだ桑山は、卒業後渡米し、日本画の手法を生かしながらも絵画的な要素を極限まで排除した、独自の絵画を確立した。以後、桑山の探求は素材へと向かい、絵画は物質性を帯びていく。さらに物質としての「絵画」は、複数の絵画の反復が生み出す「空間」の構成へと展開し、1990年代からは、人工的で無機質なパネルを用いて建築空間を変容させ、新たな芸術空間を創出するプロジェクト型の作品を相次いで発表している。

本展では、サイズやプロポーションが異なる当館の4つの展示室を使い、その特徴を最大限に生かしたインスタレーション作品《金沢21世紀美術館のためのプロジェクト》で、桑山の空間表現の新展開を展観した。

### 《展示室10のためのプラン》

2枚ずつ連結させたゴールドのパネル16点が壁2面に一列に並べられた。大量生産の工業製品を思わせるシンプルな形状のパネルはベークライト加工された合板にメタリックスプレーを均一に塗装したものである。材質、形、サイズ、色…あらゆる要素が作家の綿密な計算によって割り出されているが、そこに作家の手の痕跡はない。同一の精度をもって複数点制作するこの作業には、膨大な時間と労力を要することが推察される。

メタリックな表面をもつ無機質なパネルが照明や鑑賞者の視点によって表情を変え、光の変化が空間を意識させる展示であった。

### 《展示室12のためのプラン》

1996年のプロジェクトにおいて発表された素材を、当館展示室に合わせて再構成し、新作として見せたこの展示は、桑山にとっての作品が物質ではなく、空間であることを印象づけるものであった。

展示室入口から見て正面の壁一面にメタリック塗装を施された2色のベークライト合板が交互に並べられた。それらはわずかにブルーとイエローの発色をもつが、光の状況によって変化する表面の固有色を認識することは難しい。

展示の現場において、桑山自身が素材の展示位置や点数、照明を調整し、作品は初めて完成する。5年の時を経た素材が、「いま」の空間として立ち上がる様子に、桑山が追求する芸術の本質を垣間みることができた。



1. 展示室11のためのプラン (イエロー、オレンジ)  
2011年  
アノダイズド・アルミニウム 金沢21世紀美術館蔵
2. 展示室10のためのプラン (ゴールド)  
2011年  
メタリック塗装、ペークライト加工合板、アルミアングル
3. 展示室12のためのプラン (ブルー、イエロー)  
1996-2011年  
メタリック塗装、ペークライト加工合板、アルミアングル
4. 光庭のためのプラン (ゴールド、シルバー)  
2011年  
アノダイズド・アルミニウム

1. Photo: SAIKI Taku  
2-4. Photo: WATANABE Osamu

4

#### 《展示室11のためのプラン》

オレンジとイエローのアルミニウムのオブジェ各8点が交互に床一列に配置され、天井高9メートル、全長約66メートルの白い壁は、そのまま残されている。この展示室の大きく美しい空間、とりわけ壁の美しさを生かしたかったと桑山は明かし、モノの存在により「建築空間をアートの空間に作り変える」ことが、芸術家である自身の仕事なのだと語った。

後に本作品は当館のコレクションとなったが、単に空間を構成する素材を収蔵するのではなく、異なる展示室における展示プランもあわせて収蔵されている。今後、展示のたびに作品が検証され、プランが蓄積されていくことになるだろう。

なお、2012年に神奈川県立近代美術館 葉山で開催された個展では、このコレクションを出品、当該美術館空間における新作として発表された。

#### 《光庭のためのプラン》

ガラスの壁に囲まれた中庭にゴールドとシルバーのアルミニウムのパネル各12点が放射線状に立ち並ぶ作品である。桑山はあくまでも人工的な建築空間と捉えるが、天候や時間帯によって様々な表情を見せるこの空間は、これまで自然を介入させることがなかった桑山の作品の中では異色であり、「今までにない空間を作り出していくのが芸術家の仕事である」という桑山の言葉を想起させる。

会期中には、天候や時間帯によって変化し続ける空を背景に、時には風でパネルが揺らぎ、時には床に雪が積もり、作品は様々な表情を見せた。

4展示室を使った4点のインスタレーション作品という極めてシンプルな構成のなかに、桑山の芸術観が浮かび上がる展覧会であった。また、与えられた場を読み解き、プランを起こし、現実の空間で完成させるという展覧会制作における一連の流れは、作家・作品調査のまたとない機会となった。その研究の場は、今後のコレクション展示を通して、未来へと引き継がれていこう。

(平林恵)